

龍、北、仰、威、儀、。

梧桐先生百合作述實難得這平穩

たのか身にまむさむさ此夜は

熊本ある第五高等學校の開校紀念

會を祝ひてよめる

在帝國大學 受樂院義春

秋の夜よめる 稼 堂

ゆふされは天の川風ふさちらて

庭のさゝはら音さやくなり

年ごとにまける小松にさかえゆく

をりにふれて

巴 城

學ひの園の色を見えける

もろあしの醜のは草も日の本の

谷川のちかれをよもにつとへきて

刀の風にあひきやはせぬ

すみやまさらむしら川の水

木の下に夢もむすはぬ武士の

# 批評

活道徳經——『養神』を讀みて

溪 川 學 人

前號の紙上に『養神』といふ一篇あり、小原君の筆なり、議論正確、文辭も亦爽麗なり、讀みて大に快を覺ゆ、おのれ今此に記さんとするもの、或は夫の彼詩の一句は彼詩の一篇なり、Every child is a poet for a canto、といへる笑を買ふか買はぬか知らされども、こにかくおのれに一筆をか、一給へ。

おのれ、かれてより天の聲といふ言を聞けり、されど其心は知らざりしが、或夜徒然なるまゝ、例の古歌ども打ち誦してありけるに、ゆくりなく思ひあたる處あり、其れより一二日をへて花見にいでしに、いよいよ天の聲といふを知りぬ。

貝原益軒翁が天和俗訓に仁は天地の心なりといへり、實に天地に心あるなり、貴賤を隔てず能く我を愛す、此愛唯我を娛ばしむるには

あらず、常に我を教ふ。斷崖三千丈、月斜めに懸り、長江万里、風穩かに渡る、我行てその處に到れば、天地我に教ふ。丈夫の氣概は當に此の如くあるべし、空高く海濶く、眠鷗夢靜かなる、我行てその處に到れば、天地我に教ふ。丈夫の度量は當に此の如くあるべし、其他山村一葉の花は、樂天の道を教ふるなり、古城一片の月は、百年の昔を語るなり、見よ、隆中の山水は、諸葛亮を訓へ、名山大河は、司馬遷を訓へ、マルトボルクの山城は、マルチン、ルーテルを訓へき、夫の佐渡の荒陵は、實に蒲生君平を訓へて、維新中興の元勳者たらしめたるにあらざや、已に天地道を我に教ふ、あに其聲なからんや、或人の句に歌しらぬ旅人は、なし春の海さいへるが如く、春光駘暢たる時、徐に大海のほざりを行かば、油然として我心を鼓するものあり、此物即ち天の聲なり、已に天地に心あり、天地に聲あり、其心は仁、其聲は愛なり、故に吾天地を名けて、活道徳經さといふ、誣言にはあらざるべし、吾毎に慾火燃えて抑へかたき時は、瞑目して嘗て遊びし山川湖海を憶へば、火燄忽ち消れて心又舊の如し、是れ活道徳經を纏むがゆゑなり、おもふに古來親しく此の道徳經を讀みたるものは、高尚純美の人となる、夫の田夫野人、其心の純一なる都人士のかけても及ばぬ處あるは、蓋し其一生此道徳經の中に在ればなり。

此のれこゝに附けていふものあり、世には我古來の歌の花月にのみ當みて世態人事に乏しきを痛く嘆くものあめれど、おのれは反てこれを喜びとする所なり、何ぞおのれは是れ天の心、天の聲を歌ひたるものにして、我邦俗の高雅淳良なるを表はしたるものなればなり、尤ふ其歌一二を讀め。

ちりちらす人もたつね故郷の露けき花に春風を吹く。

照りもせずくもりもはてぬ春の夜のおほろ月夜にしくものろなき。

何如に幽玄なる、天の聲の美妙なる、天の心の仁慈なる、高きより卑に傳へたるなり、古人は純朴にして儻りなし、故に能く天の心と天の聲とを知れり、又能く此道徳經の味を知りつ、されば古代の歌は至幽至玄一たび之を吟むれば、鬼神も泣く、後の世となりては人情俗に流れて歌も亦俗、見るだにも嘔吐せんさす、或る人の修辭せんせせば、先づ修辭せよさといへる理ある言なり。

夫れ人、生れて天地の間にあり、なごか其故なからん、人たるものこを知らずして徒らに暮す、罪之より大なるはあらず、我生國に三浦梅園さいへる碩儒ありけり、常に師天地友古今の語を以て諸生に教へられたりき傳ふ、おのれか以上のべたる事即ち此師天地の心なり、今不文を顧みずして此誌を汚すは、唯諸賢の教を仰がんとしてなり、幸に宥し給へ。

### 『養神』を讀む

善言生

一尺の布縫ふ可し、一斗の米舂く可し、况んや万斛の粟、万匹の布に於てをや。然るを人あり、之を取て、溝壑に棄てば、誰か其天物を暴殄するを咎めざらむ。殊に知らず、其之を咎むる人、却て往々天物を暴殄する人ならんとは。

自然の人に於ける、豈徒に之にパンを與ふるのみならんや。亦以て其の美を開展して、人の之に「浴」せんことを欲す。萬古の芙蓉峰、何が故に高きか。千秋の琵琶湖、何が故に美なるか。清泉あり、混々として湧く、之に就けば「紅さいた口」を忘れ、野に百合花あり、爛熳さし